

PANews

Vol. 22, No. 2, May. 2012

ISSN 1881-2864

PA ニュース

発行：日本生理人類学会

www.jspa.net

もくじ

▽国際会議のお知らせ	1
▽特集 研究奨励発表会	2
▽研究満喫	4
▽学会センサス	5
▽ from Editors	7

【国際会議のお知らせ】

国際生理人類学連合

インターコングレス 2012 のご案内

国際担当理事 恒次祐子, 原田 一

国際生理人類学連合の定期大会である ICPA2010 と ICPA2013 の間に当たる本年に、北京にてインターコングレスが開催されます。皆さまの積極的なご参加をお願い申し上げます。

■大会テーマ：Adapting to Life in Asian Mega-Cities

■議長：

Prof. Alan Bittles (Murdoch University and Edith Cowan University, Australia)

Prof. Wei Wang (Edith Cowan University, Australia, Capital Medical University, and Chinese Academy of Sciences, Beijing, China)

■日程：2012 年 9 月 3 日(月)～5 日(水)

■場所：中国 北京市

■大会ウェブサイト

<http://www.geneticsandpopulationhealth.com/>

■早期参加登録期間

2012 年 4 月 10 日(火)～7 月 31 日(火)

■登録費

早期登録 8 月 1 日(水)以降

一般参加者 24,000 円 28,000 円

同伴者 12,000 円 16,000 円

学生 12,000 円 16,000 円

1 日参加の場合

一般参加者 10,000 円 学生 6,000 円

■支払い方法：下記に円建てでお振込みいただけ

れば担当がまとめて送金します。振込手数料はご負担ください。別途

http://www.geneticsandpopulationhealth.com/index.php/IAPA2012_Registration

より Registration form をダウンロードし、ご記入の上、以下の参加登録メールアドレスまで添付ファイルでお送りください。登録費の支払いとメールでの連絡が揃った時点で参加登録がなされたものとみなします。

参加登録メールアドレス

恒次祐子 yukot @ ffpri.affrc.go.jp

登録費振込み口座

【郵便振替の場合】

口座名 国際生理人類学連合大会日本事務局
記号 10620

番号 21081411

【銀行振込の場合】

ゆうちょ銀行 店名 ○六八(ゼロロクハチ)
店番 068 普通口座 2108141

口座名 国際生理人類学連合大会日本事務局

■アブストラクト締切：2012 年 6 月 4 日(月)

■その他：詳細は日本生理人類学会ウェブサイトにて随時お知らせいたします。

■お問い合わせ

日本生理人類学会 国際担当理事
森林総合研究所 恒次祐子

Tel: 029-829-8310

E-mail: yukot @ ffpri.affrc.go.jp

東北工業大学 原田 一

Tel: 022-304-5575

E-mail: h-harada @ tohtech.ac.jp

【特集 研究奨励発表会】

研究奨励発表会をご存知ですか？ 生理人類学とその関連分野の研究を始めて間もない研究者のタマゴ（学部卒論生や修士課程の学生）に、プレゼンテーションの機会と交流の場を設け、研究活動を奨励するために、2007 年度から始まった行事です。当初は東京だけでの開催でしたが、2010 年度から東京と福岡の 2 会場で開催されています。今後、関西での開催も計画されています。

2011 年度は東京会場（2011.12.17）と福岡会場（2012.2.11）で同会が催され、東京会場 33 演題、福岡会場 15 演題、合計 48 演題の中から、以下の 8 演題が優秀発表賞に選ばれました。PANews の誌面で受賞者のことばを掲載いたします。ベテラン研究者の方には研究生活に入った頃の初々しい気持ちを、発表者と同世代の方には切磋琢磨する気概を思い抱いていただければ幸いです。また、本年度も多数の発表を期待する次第です。

（各人の所属は発表時のものです）

ユーザインタフェース観察時の子どもの Mu 波抑制 槇得達也(九州大学)

卒業研究を行う上で何らかの賞をとることをひとつの目標としてやってきたので、このような賞を頂くことができ大変嬉しく思っております。この研究は、子どもが被験者でありかつ同様のインタフェースを大人に観察させた場合の結果と比較するものなので、子どもに飽きさせないようなかつ大人の結果と比較できるようなプロトコルにするという点で苦労しました。結果自体は予想と異なり、その時点では“嬉しさ”はあまり感じませんでしたが、卒業論文として提出した時に“達成感”を感じました。

発表当日は九州地区の奨励発表会ということで、アットホームな雰囲気の中あまり緊張せずに発表することができました。質疑応答についてはゼミや専攻の中での発表にて受けた質問と似通ったものもいくつかあり、立てた考察に対してある程度の確信を持ってよいと感じました。しかしながら同時に、研究のテーマについて掘り下げていくがゆえにテーマ周辺に偏ってしまっていた視点とは異なる視点からの質問もあり、できるだけフィルターがない状態で考察すべきであると感じました。

日帰り型森林セラピーがもたらす生理的变化

池井晴美(千葉大学)

この度の受賞に対し、大変嬉しく、また光栄に思っております。宮崎良文先生、李宙堂先生、共に実験に取り組んだ研究メンバー、ならびに発表の機会を与えてくださった石橋圭太先生に深く御礼申し上げます。自然セラピーに関わる研究者を目指す私にとって、この賞を授かることは大きな励みであると同時に責任も感じております。

高校時代、私は地球環境問題や森林破壊の現状を改善したく、自然環境の有用性を証明したいと思っておりました。森林セラピーと出会ってから、森林などの自然環境が人間にもたらす癒しの力を証明したいと考え、千葉大学園芸学部に進学いたしました。その後の大学生活において、その思いはより強くなり、昨年、入学前から希望していた宮崎研究室に入り、「日帰り型森林セラピーがもたらす生理的变化」を中心に研究を進めています。

今後はこの賞を励みとして、研究室の諸先輩方を目標に研究を深め、将来は日本全国の森を対象とした実験・研究に励み、人と環境が調和する良好な社会環境の形成に貢献したいと思っています。

青年期女性における多チャンネルテレメータシステムを用いた咀嚼筋筋電位計測による咀嚼挙動に関する一検討

三浦仁実(長崎県立大学)

この度は、このようなすばらしい賞をいただき誠にありがとうございました。ご指導いただいた諸先生方に深く感謝いたします。また、研究に協力いただいた学生諸氏にもこの場をお借りしてお礼申し上げます。

私の研究は、物性の異なる 4 種類の米飯のテクスチャーとヒトの咀嚼筋筋電位計測との関連性について表面筋電図法により検討したものです。本システムを用いての咀嚼筋の筋電位計測はほとんど例がないため、手探りからのスタートでした。特に、解析において、パソコン上で数値化する作業を手作業で行い、作業する者による誤差が生じないように全て一人で行わなければならないなど苦労がありました。今回の発表は咬筋のみのデータでしたので、今後はその他の咀嚼筋についての検討や、

米飯以外の食品についての検討の必要があるものと考えています。また、本研究では青年期女性を対象としましたが、ヒトの咀嚼に関する基礎的なデータベースが不十分といえ、さまざまなライフステージ別の検討も必要であると感じています。生理人類学会の諸先生方には今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

振動による触覚刺激が音判断に及ぼす影響

鈴木智裕(千葉大学)

この度は平成 23 年度研究奨励会におきまして優秀賞をいただき、誠にありがとうございます。今回発表させていただいた研究を行う上で、自分が楽しめる研究をやりたいと常に心がけて研究を進めて参りましたが、その分実験を進める過程での苦労はもちろん、過去の論文調査や研究に対するアイディア出しなど研究の初期段階から大変苦労する事になりました。しかし、結果として今回の奨励会にて優秀賞をいただくことができた事は大変光栄に思うとともに、研究を行う者として非常に幸せであると感じます。

また研究の結果が出た際にも、自分自身が想い描いていた結果と多少の違いがあったため、すぐに研究結果に対する喜びや達成感を感じることはありませんでしたが、本学会発表の受賞と発表後に先生方よりいただいた言葉から徐々に本研究に対する達成感などを感じるようになりました。最後になりますが、本研究を進めるにあたって御指導いただいた勝浦先生、下村先生をはじめ、多くの関係者の方々に心からお礼申し上げます。

女性の概日タイプ・精神衛生・生理周期関連健康度に関する総合質問紙調査 ―チェコ共和国と日本の比較研究―

小林 茜(高知大学)

発表会が初めてであったために緊張をし、息も絶え絶えで早口になっていた私は、言葉がうまく出てきませんでした。私を見つめる顔、顔、顔。上手く操れないパワーポイント。準備したはずなのに発表の時にだけ消え去る自分の資料。すべての要因が私を焦らせ、8 分間の発表の記憶を薄れさせたのです。

しかし、その後の質疑応答では、みなさんから

多くの質問・ご意見を頂き、それが自分の中でも引っ掛かっていたところであったために、本来の自分を取り戻し、落ち着いて受け答えをすることができたと思います。そのために今後の研究への大きな収穫ができました。発表をすることで、多くの人の多くの目から研究を見てもらえるとは、なんと素晴らしいことでしょう。今さら気付いたことに少し恥ずかしさがありますが、今気づけたことに大きな喜びを感じています。すべての関係者の皆様、ありがとうございました。

若年者における下肢筋横断面積と歩行動作との関係

中島弘貴(九州大学)

この度、優秀発表賞を受賞したことを大変光栄に思います。私は介護予防に興味があり、下肢の筋肉の衰えを歩行動作から推定することを目指して研究を行っています。その最初の研究として、若年者を対象とし、大腿部と下腿部の筋量との間に何かしらの関係性があるのかを探りました。研究のために覚えることが多く、また実験や解析など結果を得るまでの道のりも長く、研究の大変さを痛切に感じました。しかし、その分色々な関係性を見つけることができた時の喜びは想像以上で、本当にこの研究に取り組んで良かったと思いました。さらには優秀発表賞まで頂き、今は次の研究を早くしたいという気持ちで一杯です。

発表奨励会では他大学の学生の皆様の研究発表を聴講でき、また懇親会では他大学の先生より貴重な助言を頂き、大変刺激になりました。発表奨励会で得ました知識や助言を今後の研究活動に活かしていきたいと思います。最後に本研究に際して、ご指導頂きました村木里志先生や、実験に協力して頂いた先輩や被験者の皆様に心より感謝申し上げます。

肝細胞機能向上と NO 濃度の関連性

隅井干城(芝浦工業大学)

この度は、平成 23 年度日本生理人類学会研究奨励発表会優秀発表賞という素晴らしい賞に選出させていただき、誠にありがとうございます。このような賞をいただけたのは、ひとえに工藤(奨)研究室というすばらしい研究室に出会えたからだと思っております。

本研究は私が修士でゼロから立ち上げた研究でした。研究の方向性を考えることから始まり、機材の発注、細胞の培養方法、実験装置の作成まで1年かけて準備をしました。努力が実ったのは修士2年目の夏、後輩の手伝いにも助けられ初めて結果が出ました。しかしうれしさに浸っている時間はそれほどなく、結果の考察をするほど次々と分からないことが現れ、第2・第3の実験が必要となってきました。それでも新たな結果が出ることが楽しくて夢中で実験を進めていきました。

今こうして得られた結果をもとに学会で発表し、質問や指摘を受けると自分は研究を行ってきたのだと感じます。博士課程でもたくさんの質問が飛び交うような研究を行っていきたいと思っています。

唾液中の電解質濃度と味覚閾値の関係

山科綾子(福岡女子大学)

この度は、日本生理人類学会研究奨励発表会にて、優秀発表賞をいただき、誠にありがとうございました。受賞できるとは思っていなかったため、受賞の話を伺った際は本当に驚きました。

「唾液中の電解質濃度と味覚閾値の関係」というタイトルで発表させていただきました。本研究では、味覚閾値の検査と同時に唾液の採取を行い、唾液中のNa⁺の濃度と味覚閾値の関係を調べることで、味覚閾値変動のメカニズムを明らかにすることを目的として実験を行いました。データが思うように取れておらず、データ数が少なくなったり、予想とは異なる結果となったりとなかなか思うようには進みませんでした。何とか結果をまとめて発表させていただきました。

当日いただいたご指摘・アドバイスはぜひ参考にさせていただき、今後も研究に励んでいきたいと思っています。ご指導いただいた森田先生、発表の機会を下さった日本生理人類学会の諸先生方、誠にありがとうございました。



【研究満喫】

論文博士になるまで

福田裕美(福岡女子大学)

2012年3月末、論文博士として念願の博士号を取得することができました。福岡女子大学の修士課程を卒業してから博士号を取得するまでに9年が経ちました。この機会を頂き、私が論文博士となるまでの9年間の経緯をご紹介しますと思います。

私は修士課程修了後、博士課程へと進学しませんでした。その理由は、一つは母校である福岡女子大学には博士課程がなかったということ、もう一つは一度大学を離れ、社会人としての生活を送ってみたかったためです。そのため、修了後は福岡県内の高校で講師として勤めました。3年目が過ぎる頃、大学の恩師にあたる森田健先生から、香港理工大学(Hong Kong Polytechnic University)での研究助手(Research Assistant)のポストをご紹介頂きました。海外での研究活動に興味があった私は、すぐに香港行きを決心しました。

海外の大学というのは、日本の大学とは様々な点で異なり、視野が広がりますので、機会があれば何年間か滞在してもいいのではないのでしょうか。香港の公用語は広東語と英語で、日常会話は広東語が主ですが、大学では基本的に英語で授業が行われます。研究助手は個々の先生の研究資金で雇われており、仕事内容は、雇用する先生が担う研究プロジェクトの遂行です。その当時、同じラボには森田先生の恩師にあたる登倉尋実先生(奈良女子大学名誉教授)が客員教授として滞在されていて、研究や香港での生活について、多くのご助言を頂きました。香港の先生からの指示は、概して日本の先生からのもののように丁寧ではなく、しかも教員、学生、助手のいる部屋は校内で散らばっていてそれぞれが会う機会は少ないので、登倉先生には大変助けて頂きました。

香港での生活は、人の多さや交通騒音、家賃の高さなどに悩まされましたが、中華以外にも多国籍料理が楽しめ、ハリウッド映画が日本よりも半年も早く半額ほどで観られ、交通費は安いなど、様々な魅力もありました。香港で3年間過ごした後は、福岡女子大学で助手に採用されたので帰国することになりましたが、採用されていなかったら今も香港で働いていたかもしれません。



香港理工大学 (Hong Kong Polytechnic University)

実は、福岡女子大学に勤め始める頃は、博士号を取得できるとは考えていませんでした。しかし、森田先生が再び職場での研究指導員を引き受けて下さり、他の先生方も学位を取得するように後押しして下さいました。論文博士を目指すことになりました。論文博士が課程博士と違う点は、審査の段階で研究歴が必要なことと、査読を受けた論文が課程博士より多く必要なことです(必要な研究期間や論文数は申請する大学や分野によります)。また、当然ですが、勤務時間中は研究以外の仕事があるので、課程博士より研究時間の確保が難しくなります。そのため、研究は効率的に行い、家族の理解と協力を得ることが大事です。

ところで、論文博士になる機会を得ることは、現在は厳しくなっています。大学側としては、論文博士よりは課程博士になることを勧めたいのは当たり前で、私のような、すでに研究職についている者の場合、社会人入学をすることが一般的だと思います。しかし、社会人入学を認めるかどうかは職場しだいでもあり、実際、私の場合は諸事情により社会人入学は難しい状況にありました。幸い、九州大学芸術工学部の安河内朗先生が論文博士申請の主査を、綿貫茂喜先生と樋口重和先生が副査を引き受けて下さったので、私は博士号を取得することができました。また、研究に関しては、鹿児島大学の辻村誠一先生や Liverpool John Moores University の Jim Waterhouse 先生に多くのご助言を頂き、充実した研究活動を行うことができました。このように、私が博士号を取得できたのは、森田先生をはじめとする多くの先生方のおかげです。論文博士になるには、課程博士になるよりも多くの時間と努力、周囲の協力、そし

て運が必要なかもしれません。

こうして多くの先生方のご協力のもと博士となったのですから、今後の研究活動は一層頑張りたいと思っています。拙筆ではありますが、論文博士になるまでの私の経験が、研究者を目指している学生の方々にとって、少しでも今後の参考になれば幸いです。

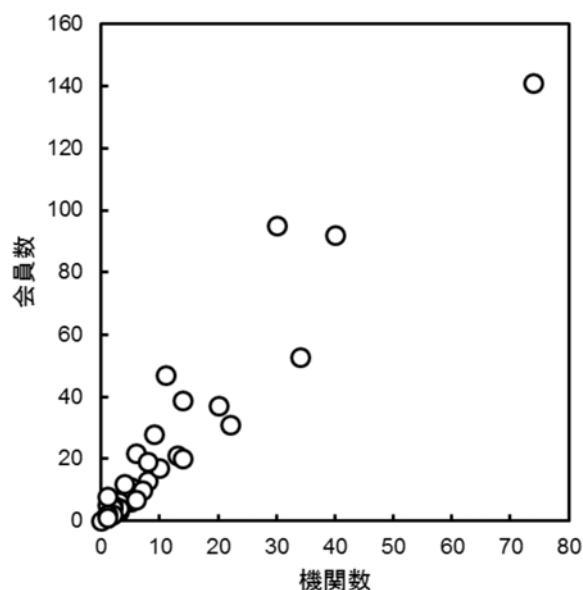
【学会センサス】

その2：都道府県別会員分布

▽ PAnews 第14巻2号(2004年)に、2003年12月の時点で、生理人類学会の会員が各都道府県に何人ずついるのかを示した日本地図が掲載されました。ただし、会員の約7割が大学などの教育機関および国公立の研究機関に所属していたことから、これに該当する699名の分布図でした。

▽そこで今回は、2011年8月時点の会員名簿に基づいて、日本在住の全正会員を対象に、都道府県別会員分布を調べてみました。該当人数は830名で、会員の所属機関には企業等も含まれています。

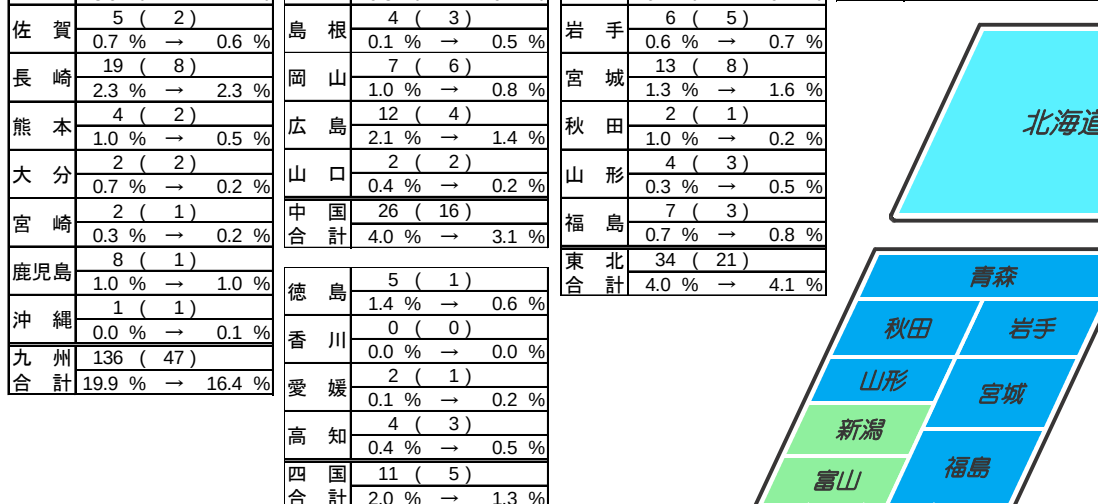
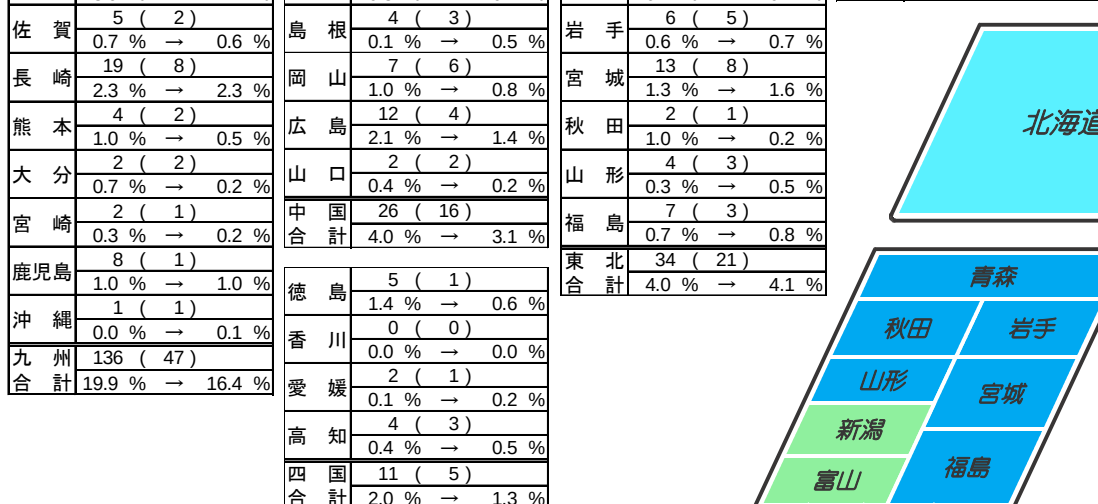
▽前回の調査では母数を大学および公的研究機関に所属する会員に限っていたため、残念ながら前回と今回で厳密に会員比率を比較することはできません。それを承知で分布図を見渡すと、地方別では、関西地区の会員が他の地方に比べて大きく増えているようです。また、会員がい



ない空白県は目下のところ香川県のみです（前回調査では香川と沖縄が空白県でした）。

▽都道府県別の機関数と会員数の関係を見てみると、1機関当たり平均2名ずつ会員が所属していることがわかりました。ただし、機関数が同程度なのに、会員数に開きがある場合があります。

ます。これは特定の機関に会員が集中していること（多くの学生が所属している大学の研究室など）を表しています。逆に会員数の割に機関数が多い地区では、小規模ながらも機関ごとにバラエティに富んだ研究が行われているのかもしれない。

福 岡	95 (30) 13.9 % → 11.4 %	鳥 取	1 (1) 0.3 % → 0.1 %	青 森	2 (1) 0.1 % → 0.2 %	北海道	28 (9) 2.6 % → 3.4 %
佐 賀	5 (2) 0.7 % → 0.6 %	島 根	4 (3) 0.1 % → 0.5 %	岩 手	6 (5) 0.6 % → 0.7 %		
長 崎	19 (8) 2.3 % → 2.3 %	岡 山	7 (6) 1.0 % → 0.8 %	宮 城	13 (8) 1.3 % → 1.6 %		
熊 本	4 (2) 1.0 % → 0.5 %	広 島	12 (4) 2.1 % → 1.4 %	秋 田	2 (1) 1.0 % → 0.2 %		
大 分	2 (2) 0.7 % → 0.2 %	山 口	2 (2) 0.4 % → 0.2 %	山 形	4 (3) 0.3 % → 0.5 %		
宮 崎	2 (1) 0.3 % → 0.2 %	中 国	26 (16) 4.0 % → 3.1 %	福 島	7 (3) 0.7 % → 0.8 %		
鹿 児 島	8 (1) 1.0 % → 1.0 %	合 計		東 北	34 (21) 4.0 % → 4.1 %		
沖 縄	1 (1) 0.0 % → 0.1 %	徳 島	5 (1) 1.4 % → 0.6 %	計			
九 州	136 (47) 19.9 % → 16.4 %	香 川	0 (0) 0.0 % → 0.0 %				
合 計		愛 媛	2 (1) 0.1 % → 0.2 %				
		高 知	4 (3) 0.4 % → 0.5 %				
		四 国	11 (5) 2.0 % → 1.3 %				



データの見方

県名	会員数 (所属機関数)
	2003年調査時の会員比率 → 今回調査時の会員比率

三重	8 (5) 0.9 % → 1.0 %	新潟	7 (5) 1.0 % → 0.8 %	茨城	17 (10) 2.7 % → 2.0 %
滋賀	10 (7) 0.3 % → 1.2 %	富山	6 (3) 0.3 % → 0.7 %	栃木	8 (5) 2.4 % → 1.0 %
京都	37 (20) 2.0 % → 4.5 %	石川	22 (6) 1.1 % → 2.7 %	群馬	6 (4) 0.7 % → 0.7 %
大阪	92 (40) 10.9 % → 11.1 %	福井	2 (1) 0.4 % → 0.2 %	埼玉	21 (13) 1.4 % → 2.5 %
兵庫	39 (14) 4.6 % → 4.7 %	山梨	3 (3) 0.4 % → 0.4 %	千葉	47 (11) 4.1 % → 5.7 %
奈良	6 (3) 0.9 % → 0.7 %	長野	11 (5) 1.3 % → 1.3 %	東京	141 (74) 19.2 % → 17.0 %
和歌山	5 (2) 0.6 % → 0.6 %	岐阜	1 (1) 0.1 % → 0.1 %	神奈川	53 (34) 4.1 % → 6.4 %
近畿計	197 (91) 20.0 % → 23.7 %	静岡	20 (14) 3.3 % → 2.4 %	関東計	293 (151) 34.8 % → 35.3 %
		愛知	31 (22) 4.7 % → 3.7 %		
		中部計	103 (60) 12.7 % → 12.4 %		

生理人類学会 会員分布 2011年8月時点（該当会員数830名）

from Editors

次号 No.3 の原稿締切は 2012 年 8 月 1 日です

▽今号は「学会センサス」として都道府県別会員分布図や、研究奨励発表会にて優秀発表賞を受賞した方々のコメント、「研究満喫」では福田裕美先生（福岡女子大学）による論博取得に至るまでのプロセス等々、密度の濃い内容をお届けすることができました。御寄稿下さった皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

▽PANews の発行ペースが 2 ヶ月に 1 度から 3 ヶ月に 1 度変わったため、「ニュース」としての速報性は、正直なところ維持することが難し

くなりました。大会会告など、速報性が要求される情報の提供は、これまで以上にホームページやメーリングリストなどのネットメディアに肩代わりしてもらうとして、紙媒体の本誌では「最新ではないけれど古くない」記事によって学会と会員のみなさまをつなごうと、試行錯誤中です。ご意見・ご要望がありましたら、下記までよろしくお願い申し上げます。

▽PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター
仲村 匡司 京都大学大学院 農学研究科

メールアドレス panews@jspa.net

※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。